

---

# 他の多の世界

コクポ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

他の多の世界

### 【Nコード】

N6249Z

### 【作者名】

コクポ

### 【あらすじ】

主人公「海藤かいとう蓮れん」は、自分の運命をあまり良くは思っていない。そんなある日、人生の転機を迎える出来事があった。蓮が出会ったのは、『悪魔や吸血鬼や魔法使いや天使や不死身の人間？等々』自分と違う種族の生物を見て、「海藤蓮」は、新たな世界を知る。だが、世界を知ることには蓮の体には、何らかの変化が・・・そして、世界のはてで見る世界の景色とは。

世界の変貌を賭けた複雑怪奇なミステリアス小説開幕！！

## 始まりのページ

「ねえ、聞いた？また例のあいつが、奇妙なこと言ったらしいよ。」

「あつ！知ってる！ヤバイよね、あいつ。」

「おい、知ってるか？あいつまた・・・」

「知ってる知ってる、まただろ。」

夕暮れで紅く染まった教室、目が覚めたらそこにいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

また寝過ぎしたか、なんて言わなくていいか。

まるで、世界の終わりを告げるように紅くて、綺麗な夕焼け、そんなことを考えながら教室を360度見渡すと、窓側の一番前の席、女子が座っていた。

その女子は、皆からあいつって呼ばれてる。俺は、その女子と小学校から今の間まで、ずっと同じクラスだった。

中学に入って、あいつが言った一言であいつは、あいつになった。

今は先生以外の人は、あいつの名前を呼ばない。いや、あいつの両親と先生以外か。

「・・・帰らないの？」

けっして、振り返った訳でもなく、ただ、前を向いたままあいつは俺に言った。

とても小さな声だったけど、清んだ教室に、ほどよく反響して、俺の耳にその声は届いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・無視？それとも、寝たふり？起きてることは、知ってるんだけど。」

別にあいつのことが嫌いな訳じゃない。ましては、嫌われてるからそれに乗じて無視してる訳でもない。

ただ、あいつとは、いや、人とは関わり難いだけ。会話をするのが、苦手なだけ。

「・・・あなたっていつも一人なのね。」

「いつもじゃない。今は、だ。」

「・・・・・・・・そう。」

「お前こそ、いつも一人だろ。」

「私は、いいの。一人のほうがいいから・・・」

「そうかよ。」

静かな教室で二人の声だけが、虚しく反響する。日は、沈みかけも  
う、辺りは、暗くなってきた。

・・・そろそろ帰るかな、静かな教室に雑音をたてたくないから、  
静かに立ち、鞆を持って教室を出た。

出るときに振り返って教室の中を見渡したけど、あいつは、真っ直  
ぐ前を向きながら、口を小さく開けたり、閉じたりしていた。

一人言か。

教室の扉を閉めて、玄関に近い中央階段からじゃなく、教室から近  
いほうの階段から降りて玄関に向かった。

## 死するコト

教室近くの階段から降りたことに特に意味は無いが、何となく暗くなつていく校内を眼で感じたいと思つた。

玄関に着くまで、それほど時間はかからなかったが、辺りは完全に暗くなつていた。

俺の住んでいるところは、県内でも端のほうで、そこそこ家はある方だが、外灯が少ない。だから、日が沈むと真っ暗闇に近いくらい暗くなる。

真っ暗な夜道を一人で歩いていると、目の前に黒いフードを被つた奴が現れた。

暗くてよく見えないが、何か持つてる。

・・・鎌？嘘だろ！？

俺が、まばたきをした一瞬、黒いフードの奴は、俺の前から居なくなつていた。

幻覚？・・・勘弁してくれよ。

そう思つて眼を擦ろうと思つたら、両腕に違和感が・・・  
ポトンッと何か落ちる音が近くで聞こえた。

下を見ると、腕が二つ、関節より少し下あたりの大きさ、道に転がつていた。

．．．．．声が出ない。凄く激痛で、叫びたくなる痛みなのに、  
声が出ない。

痛みは、腕だけじゃ無かった。腹にも、もの凄い激痛が．．．

．．．．．俺、死ぬのかな？

ドシャと上半身がアスファルトに叩きつけられた。

痛い、痛い、寒い、死ってこんな感じなのかよ．．．死んでも良い  
って思ってたけど、いざとなったら、怖くて辛い。今、思い返せば、  
まだしたいこと沢山あったのに．．．．．もう、ダメだ。意識が、  
遠く．．．．．

## 眠らないレクイエム

「あれれれれ！？ちよつと愉快な格好をしている少年Aがいるよ！  
楓<sup>かえで</sup>ちゃん」

・・・女の子の音がする。

「そうね、愉快すぎてバカみたいな格好ね。雪花<sup>ゆきか</sup>ちゃん。」

「ねえ、何してんの？少年A君。」

助けてくれ・・・死にたくない。

「・・・口をパクパクしてるだけじゃ分からないわ。それとも読唇術ゲームなのかしら？」

違う！声が出ないをだ！助けてくれ！

「うーん・・・分からない、難しいね、読唇術ゲーム。」

ゲームなんてしてない！助けて・・・もう、ダメだ。もう助からないな、諦めるか・・・

「あら？動かなくなっちゃったわ、どうしましょ」

「うーん、しょうがないから君に新しい運命を与えよう、その代わりに、私達の言うことを聞くのよ。いい？よかったら返事！」

雪花は、人差し指を前に出して言った。



「彼、返事できなさそうよ、雪花ちゃん。」

「ありゃりゃ、じゃあ良いや、いくよー！楓ちゃん。」

「分かったわ、雪花ちゃん。」

## 新たな運命

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？俺は、生きてるのか？

「あっ！目が覚めた？早速だけど、言うことを聞いてもらっていいかな？」

「その前に自己紹介よ、雪花ちゃん。」

「あーそうでした。」と雪花が胸の前で手を鳴らして言った。

「私の名前は、天地てんち 雪花ゆきかだよ。よろしくね。」

「はあ？・・・よろしく。」

「私の名前は、赤地あかし 楓かえでよろしく。」

「・・・よろしく。」

何なんだこの状況は、俺は、死んだんじゃ無かったのか？それともここは、地獄か？天国か？  
・・・訳が分からないぜ。

「ほら、少年Aも自己紹介してね。」

「ああ、俺の名前は、海藤かいとう 蓮れんだ。ところで、聞きたいことが有るんだが。」

「んっ？何？蓮君、何でも聞いていいよ。」

雪花が、頭を少し傾けウィンクをしながら言った。

・・・かわいい。

「でも、バストとか聞いたたら、あなたの内臓をそこら辺にぶちまける事になるわよ。」

うっ！楓って奴の目が怖い・・・

「いや、そんなことじゃなくて俺を助けてくれたのは、あんたらかっつてことだ。」

「うん、そうだよ。」

満面の笑みで雪花が言った。

「どうやって俺を助けたんだ？完全に瀕死だったし、腕も、腹も切れてて、普通じゃ助けようがない状態だったと思うんだが。」

「ああ、それね。」

えっへんっ！と胸を張り、雪花が、俺の顔を見て、真剣な顔で口をパクパクした。しかもジエスチャー付き。

「・・・何をしてるんだ？」

「あら、見て分からないの？バカね。」

分からねえよ！なんだ、この動き！分かるわけ無いだろ！・・・とは、言えないな、仮にも命の恩人だし・・・仕方ない、下手に出るか。

「すみません、分からないので教えていたたけないでしょうか。」

「いやよ。」

・・・あまりにも冷たく、あしらわれた。楓って奴は、俺のことが嫌いなのか？

「嫌いよ。」

えー！読唇術は、かねてないのに、読心術をかねてるよ！この人。

「はふう、分かった？」

雪花がジェスチャーを終えたらしい、俺には何を表したいのかさっぱりだ。

「えーっと、天地さん、僕には、全く理解できなかつたんですが、何をしてたんですか？」

「えっ！・・・見てて分からなかった？・・・楓！私ってそんなに下手かなあ。」

雪花が、今にも泣きそうな顔をする。俺は何か悪いことを聞いたか？？楓の視線が物凄く、痛い・・・「大丈夫よ、雪花ちゃん、彼の頭が、ミジンコ以下だから分からないのよ、雪花ちゃんは、上手

だったわ。」

「ミジンコって・・・」

「本当に？楓ちゃん。」

「うん、そうよ。悪いのは、彼の存在よ。」

「1日でこんなにバカにされたのは、初めてだ。厄日なのか？」

「あの一・・・」

「なによ、クソムシ。」

「クソムシ扱いかよ！」

「結局何だったのか分からなかったんだけど・・・」

「そうね、ミジンコの脳味噌じゃ、分からないわよね、ミジンコの脳味噌じゃ、雪花ちゃん、説明してあげて、あの、ミジンコに。」

「存在がミジンコになってしまったようだ。・・・我慢するんだ、俺

「うん、さっきね、読唇術ゲームしてたんだよ。好きでしょ？読唇術ゲーム。」

「またもや、満面の笑みで、雪花が言った。」

「・・・てか」

「好きじゃねーよ！いつから、俺は、読唇術ゲームが好きな奴になつたんだよ！」

はっ！つい怒鳴っちまった。・・・雪花が、怯えた表情をしている。ヤバイな・・・。

そう思つた瞬間、俺の左腕が、目の前に凄い勢いで、飛んでつた。

なっ！なにiiiiiiiiiiii！俺の目の前に、俺の左腕が！左を見ると、細長い刀を持った楓が、しゃがんでいた。

「あらら、少ししか飛ばなかつたわね。」

残念そうな台詞をはいて、楓が立ち上がった。

「飛ばなかつたって！・・・グツ！」

「やり過ぎたよ、楓ちゃん。」

心配してくれたのか？楓と違って雪花ちゃんは、優しいんだな。

「いいのよ、それに、これで、死にかけだった彼が、助かった理由が分かるでしょ。」

## 新たな運命（後書き）

〈登場人物紹介〉

かいとう  
海藤 蓮 れん

この物語の主人公。

黒髪の短髪に黒い瞳、学校では目立たないようにひっそりと暮らしている。

性格は、感情的になりやすいが、基本的には優しく、負けず嫌いである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6249z/>

---

他の多の世界

2011年12月20日23時58分発行